

# 六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

奈良美智 美術家

Yoshitomo Nara / Artist



## CREATOR INTERVIEW No 154

### 奈良美智 Yoshitomo Nara

1959年青森県生まれ。1987年愛知県立芸術大学修士課程修了。1988年渡独、国立デュッセルドルフ芸術アカデミー在籍終了。ケルン在住を経て2000年に帰国。1990年代半以降からヨーロッパ、アメリカ、日本、そしてアジアの各地で規模に関わらず様々な場所で展示発表を続ける。見つめ返すような印象的な絵画、日々自由に描き続けるドローイング作品のほか、木、FRP、陶、ブロンズ、そしてインスタレーションなど多様な素材や空間に生命を吹き込む様な彫刻作品を制作。また、制作の日々や旅先での出会いを収めた写真作品も発表している。

作品はニューヨーク近代美術館、ロサンゼルスカウンティ美術館、ボストン美術館、ナショナルギャラリー（ワシントンD.C.）、大英博物館（ロンドン）など世界中の美術館に所蔵される。

近年の主な個展に「Yoshitomo Nara」（ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム（アメリカ）／ユズ・ミュージアム（上海、中国）、2021-23年）「YOSHITOMO NARA. ALL MY LITTLE WORDS」（アルベルティーナ近代美術館（オーストリア）、2023年）「The Beginning Place ここから」（青森県立美術館（日本）、2023-24年）など。2024年夏からはビルバオ・グッゲンハイム美術館から始まるヨーロッパ巡回展が企画されている。

NO

# 154 奈良美智 美術家

YOSHITOMO NARA / Artist

クリエイターインタビュー

「徒歩圏内の小さなコミュニティでお祭りを」

人間を人間らしくしてくれるのがアートの役割。

published\_2024.01.10 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

現代の日本を代表する美術家として、国際的に活躍する奈良美智さん。2023年11月に開業したばかりの麻布台ヒルズ中央広場には、彫刻作品《東京の森の子》が設置されました。近年は頻繁に北海道を訪れ、現地の人々と交流しながら制作や展示を行っています。そこで今回は、「森の子」シリーズのお話をはじめ、震災をきっかけに変化した制作のあり方、滞在制作を通じた北海道のコミュニティへの関わり方、そしてアートとコミュニティのこれからについて伺っていきます。

世界と交信するための“森”。

今回麻布台ヒルズに設置された《東京の森の子》は、大きさを変えて何体かつくっていて、最近ではロサンゼルスに大きいサイズのもので置かれました。世界各地に“森”という観念が広まっていく、そういう象徴になるといいなと思っています。先の尖った形は、僕が生まれ育った北国の針葉樹や、あとは子どもたちはみんな好きだと思うけれど、クリスマスのモミの木から。希望を感じさせる特別なモチーフですよ。



### 《東京の森の子》

麻布台ヒルズ中央広場に設置されたシリーズ最大のブロンズ像。他には青森県立美術館の《Miss Forest / 森の子》、栃木県N's YARDの《Miss Forest / Thinker》、ロサンゼルス・カウンティ美術館 (LACMA) の《Miss Forest (LACMA Version)》などがある。



### 麻布台ヒルズ

六本木ヒルズ、虎ノ門ヒルズに続き、森ビルが「Modern Urban Village」をコンセプトに開発を進める再開発プロジェクト。2023年11月24日開業。同施設内には奈良さんの他に、オラファー・エリアソン氏、ジャン・ワン氏、曾根裕氏などの作品がパブリックアートとして設置されている。

© DBOX for Mori Building Co., Ltd. - Azabudai Hills

僕が育った青森県は、妖怪好きな人には恐山でなじみがあるんじゃないかと思います。やっぱり仏教とは違う、昔からあるアニミズムのような信仰がまだ残っている。それがどこからやってくるかと言うと、森や山の中からなんですよね。以前行ったアイルランドでも、自然物に神が宿るような共通した宗教観を感じて、自分が「森の子」をつくったのは、人間が生まれる以前のものたちと交信するためだったのではないかと後から思いました。もし僕が南国で育っていたら、“クスの子”や“マングローブの子”になっていたんじゃないかな(笑)。

「森の子」は、大都会でも離れ小島でも、どこに置かれても存在理由があるような彫刻であってほしい。アートかどうかに限らず、街を出た時にどうしても思い出してしまう故郷の山や川に似た、生活の目印となる存在になってくれたらいい。映画『2001年宇宙の旅』の冒頭で、未知の力でつくられた立方体が出てきますよね。ああいう意思を持った構造物のように、自立してそこにあり続けてほしい。それで《東京の森の子》と同じものが南極大陸にもあって、全部地球の真ん中へ繋がって交信していたとしたら、面白いじゃないですか。

### 震災以降に発見した土の手触り。

なぜ粘土を用いた立体作品をつくるようになったかと言うと、東日本大震災が発生してから虚無感に襲われて、筆を握れなくなったことがきっかけ。すべては壊されるのに制作する意味はあるのだろうか、津波がきたら人の命までなくなっちゃうじゃないか。そう感じる中で、何か踏ん張らなきゃと思った時に、土に行き着いた。筆も握れないしキャンバスも貼れない、そんな中で赤ちゃんが最初ににぎにぎと手にとるような原始的な素材として土がありました。振り返ってみればハビリだったと思うのですが、粘土を扱う時は道具を使わず自分の手だけ。一戦交える気持ちで身体全部を使って、粘土と対峙してましたね。



奈良美智 美術家

YOSHITOMO NARA / Artist

published\_2024.01.10 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

震災以前の立体作品は、発泡スチロールを削って原型をつくり、最終的にファイバーグラスで仕上げるような表面がツルツルとしたスムーズなものをつくっていました。だけど、そのつくり方では廃棄物がたくさん出る。洗練された形にはなるんだけど、自然に優しい素材ではなく、工場の中でできるようなものだったんですね。

今は手を動かしていく過程そのものが、自分の中ですごく面白い。筆を持って絵を描く時は、次のタッチをどこに置くかとか、細かく考えないとできないんですよ。ところが粘土だと、手が勝手に動いてくれる。全て身体が教えてくれるような感じがあって、自然が味方してくれているんじゃないかと思えますね。表面がつるつとした工業製品のような昔の作風とは違い、いろいろな角度から、手の跡＝自分の思考が見えるようになりました。

### 関係性が自然に生まれることから始める。

制作の方法で言うと、洞爺湖でワークショップのプロジェクトを最近やったんだけど、それは呼ばれたから始まったわけじゃないんですよ。3年か4年ほど通っていくうちに小さなコミュニティの人たちと顔見知りになって、5、6年目くらいから何かできないかと動きが出てきたもの。最初から何かをやりようと思っていたんじゃないくて、自然に出来上がっていったワークショップだったんですね。



#### ふらっと奈良さんと

2022年に実施された洞爺の子どもたちの絵の共同制作プロジェクト。約1ヶ月間にわたる滞在制作の様子は『Summer Records 奈良さんが洞爺で過ごした夏の記録』として1冊にまとめられている。

画像：森高まき(たまたま舎)

地方へ足を運ぼうと思うのは、そこにしかないものを求めているから。洞爺湖であれば、景色やそこでお店をやっている人たちのコミュニティ。彼らはその場所に来る人たちだけを相手にしていて、例えば外に向かってこんなことやってるよ！ と積極的に発信はせず、本当に口コミレベルで発信している。だから自然にじわじわと広がっていくんだよね。最初からインターネットを使って、遠く離れた人に来てください、というやり方じゃない。そういう小さいながらも人が来てくれる環境を大切にしているコミュニティが僕は好きなんです。

洞爺湖を訪れたきっかけは、あるパン屋さんが津軽三味線の映画を自主上映したっていうたまたま見つけた記事で、もしかしたら青森出身の人かもなと思ったからでした。ただ、訪ねてみたら、お店が休みだった。で、次に訪ねたのが1年後で、また休み。その次が3年後になっちゃったんだけど、店の前に子どもがいて、やってる！ と思って入ろうとしたら「今日休みだよ」って（笑）。それでそのまま帰ってTwitterに投稿したら返事があって、実は土日しかやっていないことがわかった。そんなこともあって、すぐにまた足を運んだら仲良くなっていった。お互いに自然に近づくのを待つというかね。そんなペースなので、知らない土地で急に何かやってくれと言われてもできない。やるとしたら子どもたちと仲良くなって、その家族ともお酒を飲む間柄になってから（笑）。

#### 小さなコミュニティ間で生まれる化学反応。

飛生芸術祭の時は、廃校の周囲の林を再生しようという話のもとあって、森がどうやって再生されていくのかを見たかったから足を運んだ。予定していた前の日に行ってみたらちょうど森づくりの作業日で、これからバーベキューするから食べて行って、と。そういう流れがあって、ここで芸術祭もやっているから僕がレクチャーをすることになった。その間に子どもたちが大きくなったりしてね。

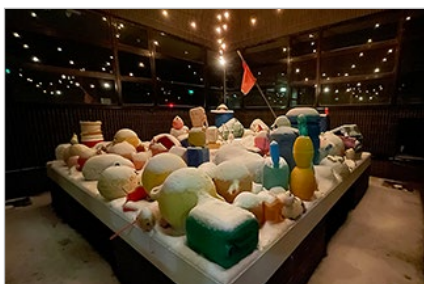


#### 飛生芸術祭

北海道、白老町内の小さな集落である飛生（とびう）にあるアートコミュニティが開催する芸術祭。アートコミュニティは旧飛生小学校にアトリエを構え、1986年発足。2009年より「飛生芸術祭」が開始。学校林を整備する森づくりの活動を軸に、1年に1度開催されている。

この芸術祭は、あくまで森をつくることが中心。その方が人が集まると思うんです。例えば美術をキーワードにすると、美術好きか作家しか集まらない。でも森って生活に身近だし、とくに北海道はアウトドア王国だから。何が楽しいって、森づくりをした後は夕方からバーベキューが始まること。人里離れてるからどれだけ酔っ払って騒いでも、誰にも迷惑かからないし。

僕が思うのは、人対人でつながるんじゃなくて、ゾーン対ゾーンで交わることが重要。若者だけ、あるキーワードだけでつながるんじゃなくて、有象無象のもやもやとした小さな塊同士が合わさると化学変化が起きやすいって思いますね。もちろん大きくなりすぎると、決まりごとが必要になって難しくなるんだけど。小さければ、フリーマーケットをやろう、お祭りをやろうといったことがとんとん拍子でできるし、その中で自分は何ができるかを考えられる。奈良さんは後片付けがうまいから片付けて、とか（笑）。美術ではないことで関われるのが、自分にとっては新鮮ですね。



#### THE SNOWFLAKES

奈良さんと飛生アートコミュニティの国松希根太さん、小助川裕康さん、奥山三彩さんの4人組のアーティスト・コレクティブ。2020年に結成されて以降、北海道をはじめ沖縄、韓国で海岸に打ち寄せられた漂流物を素材とした作品を発表している。THE SNOWFLAKESの特別インスタレーションが2024年3月24日（日）まで北海道の苫小牧市美術博物館で展示されている。

画像:特集展示「THE SNOWFLAKES」中庭展示スペース展示風景

(画像提供:苫小牧市美術博物館)

奈良美智 美術家

YOSHITOMO NARA / Artist



published\_2024.01.10 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

### その場所の雰囲気住民の誇りになる。

28歳でドイツに留学して結局12年間いたんだけど、それまでになかったコミュニティという観念について勉強できた気がする。というのも、一番楽しい思い出として残っているのが、ストリートを通行止めにして、その通りだけのフェスティバルをやっていたことなんです。200mくらいの道の通行を止めて、そこに住んでいる人たちみんなでフリーマーケットやワークショップ、音楽イベントをやったりして。日本でも下町のお祭りでは同じようなことをやっているかもしれないけど、もっとなんの変哲もないストリートでやっている。つまり、そこに住んでいるということを共通項にして、仲良くなるシステムをつくっているんだよね。

もちろんそこに住んでいなくても、ふらっと立ち寄ったら歓迎してくれるムードもあって。日本ではストリート飲みは問題になっていたけど（笑）、隣近所の人たち同士と一緒に飲み食いしてもいいじゃないかと思いますよね。物とか景色とかそういうものじゃなくて、その場所の雰囲気そのものが誇りになる。六本木も、アートナイトは4回目や5回目あたりから当然あるべきものとして定着した感があります。まさにそういうことなんじゃないかな。そのうち毎年会うご近所さんが出てきたりして、さらに根付いていくんだと思います。



#### 奈良美智「北海道 - 台湾」

奈良さんが北海道と台湾の小さなコミュニティで撮影した55点の写真作品を展示。2020年から2023年にかけて訪れた北海道の白老町や洞爺湖町、台湾の高雄市やその近辺の何気ない日々の風景がセレクトされている。タカ・イシイギャラリーにて2023年11月24日（金）から2023年12月26日（火）まで開催。

画像：奈良美智《台湾 / 恒春鎮》2023, pigment print © Yoshitomo Nara. Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

#### 区画整理され、寄り道ができない街。

都会は学校帰りの子どもたちがみんなで寄り道するような場所が少ないですね。セキュリティの問題があるのかもしれないけど、寄り道で学ぶことはいっぱいある。原っぱで知らない子と友達になって遊んだりとか、そういう広場があるといいのにな。

僕が生まれ育った時代はそこら中に子どもがいる時代で、高度経済成長の頃とぴったり重なっていました。小学校に入る前の1964年は東京オリンピック、小学校5年生の1970年は大阪万博が開催されて、最初は道なき道を歩いて小学校まで通っていたのに、小学校を出る頃には舗装された道を通るようになっていた（笑）。

寄り道で言えば、原っぱを横切って歩くと自分の歩いた跡が道になるから、つまりどこへ行ってもいい可能性がたくさんあって、原っぱを歩くだけでたくさんの未来が見える感じがあったんです。それが区画整理されて碁盤の目のようになっていくと、限られた道を歩くようになってしまう。物事を論理立てて考える力をつくかもしれないけど、論理とは別のもっととてつもない考えが浮かばなくなってくるんだよね。

#### 歩ける距離の場所に集まってみる。

小学校の数が減ってきているけれど、学校ってやっぱりみんなが集まりやすい場所。だから小学校を利用して盆踊りとかをしていったらいいんじゃないかな。なぜ学校かと言えば、その地域の人は絶対にその学校を卒業しているわけじゃないですか。徒歩圏内に存在しているのが、学校なんですね。震災の時に、家を流されてしまった地域の人は食器がないから、別の地域の人が避難場所の学校に持ってきてくれるということがあって。そんなふうに、学区というものを利用すればいいのに、と自分は思います。運送会社に頼んだりして、何かを送るとするのは非常に無駄だな、と。

最近ではじめて知ったんだけど、金沢では学区のことは「校下（こうか）」と呼ばれていて。「どこの校下？」みたいな会話を聞いた時はびっくりしました。そういう明治以降に築かれたシステムがあるわけで、それ以前は例えば神社の檀家とかね。今はかつてあったシステムが合理化されているようで、実は全然合理化されていないイメージを僕は持っています。





奈良美智 美術家

YOSHITOMO NARA / Artist

published\_2024.01.10 / photo\_yoshikuni nakagawa / text\_akiko miyaura

### アートがコミュニティの中でできること。

コミュニティの中で、アートは何ができるのか。まずアートと言う時に、いわゆるマーケットであるじゃない。そこでの成功がアーティストとしての成功と思う人もいっぱいいるわけです。お金を持っている美術館だからいい作品を収蔵できるとか、経済が潤っていないとアートが回らないとみんな思っている。でも売れるからいいとは限らない。元ブルーハーツの甲本ヒロトが言っていた「売れてるものが良いものなら、世界一のラーメンはカップラーメンになっちゃうよ」と同じで、価値を経済に置くのか、人間に置くのかで全然違う。

実はアートってもっと身近にあって、有名無名にかかわらずアーティストがコミュニティの中でどういうふうに必要なの五感を刺激してあげるか、いかにみんなにとって大切な存在になるかが大事。そこにお金は発生しないんだよね。そういう人間を人間らしくしてくれるものが、アートなんだと思う。美術に限らず、音楽でも演劇でも全部そうです。

今、美術をやろうとしている人たちは、マーケットで成功することを最初に考えているけど、まず層の厚さが問題であって、たくさんの方がいるからこそいい表現が生まれてくる。留学していたドイツの美術学校で、趣味は何？ と友達に聞いてみたら、「チェロ」と答えられてびっくりしたことがあった。そういう好きでやっている中間層がたくさんいることが大事で、アジアの中でも日本のアートの土壌の豊かさは一番だと思うよ。

## 「やりたい」の前に世界を知ることから始める。

この間実家に帰ったら、押し入れから小学校6年生の時の文集が出てきた。夢について書かれたもので、みんなは具体的にピアニストになりたい、パイロットになりたい、とあったんだけど、僕は「一人で世界一周、旅してみたい」と書いてあって。しかも「この夢は大人になっても持ち続けたい」って(笑)。結局美術の分野に進んだけど、本当はやりたくてやったわけじゃない。自然と美術家になっちゃっただけなんですよ。



奈良美智: The Beginning Place ここから

青森県美術館の前の展覧会から約10年ぶりに開催。自らの時間軸に「一本の幹」を探り当てるべく、感性の起源(はじまりの場所)へと至る5つのテーマを立て、近年の作品と学生時代までさかのぼる旧作が並ぶ。青森県立美術館にて2023年10月14日(土) から 2024年2月25日(日)まで開催。

画像:奈良美智《Midnight Tears》2023年 アクリル  
絵具・キャンバス 240.5×220.0cm 作家蔵  
© Yoshitomo Nara

大抵の美術家はなろうとしてなった人がほとんどで、なぜか話が合わないことが多かったんです。その理由がやっとわかった。高校の時はジャーナリストや詩人に憧れていたし、何がやりたいというも実はなかった。唯一昔から変わらないのは、旅をし続けていること。自分のような仕事をしている人が、シリアの難民キャンプに行ったりなんかしないわけ。でも、僕は行く。すると、それがレイヤーになって自分の作品ができていくってよくわかるんです。

世の中では自分の知らない出来事が起こっているのに、それを知らないままでいるというのは、人間としておかしいと思うんです。どんなことでも知ろうと思えば可能なんだから、そのうえで何ができるかを考えてみる。寄付するとかゴミを拾うとか何でも手段はある。初めから何になりたい、何をしたいとか決めすぎずに、いろいろなものを見たらいいんじゃないかなと思うんだよね。その方が、夢があちこちに潜んでいる感じがするし。子どもたちには「夢見たって無理だから、夢なんて持つな」と言われても、それでもたくさんの夢を見る子たちに育てほしいと思う。大人は僕みたいに小うるさいことを言うてくるもの。それでもやりたいことを見つけた感性を持った子が育つといいですね。

撮影場所：麻布台ヒルズ中央広場《東京の森の子》

### 取材を終えて……

今回は《東京の森の子》が麻布台ヒルズに設置された際に取材を実施しました。なぜ奈良さんは小さなコミュニティへ足を運ぶようになったのか。その経緯を紐解いていくと、五感を思いっきり使って地域の人々と関わり、目には見えない人間としての厚み＝レイヤーを幾重にも重ねていく「旅人」としての実践があったのだとわかりました。どんな人にもラフで軽やかに友人と接するようにお話されていた奈良さんの姿は、まさに生き方そのものを体現されているようで、深く印象に残りました。(text\_eisaku sakai)